

# ピロリ抗体検査とペプシノゲン検査

## ピロリ抗体検査

- ピロリ菌に感染しているかを**血液検査**にて調べます。
- ピロリ菌は、胃粘膜に住みつき、一般には幼少期における経口感染と、家庭内感染が多いといわれています。
- ピロリ感染が持続すると胃粘膜の萎縮（萎縮性胃炎）が起こり、胃がんを発症しやすい状態になります。その他、胃炎、胃潰瘍、十二指腸潰瘍などに関係しているといわれています。

## ペプシノゲン検査

- **血液検査**によってペプシノゲンの血中濃度を調べ、胃粘膜の萎縮度を調べます。
- ペプシノゲンとは、胃の粘膜で作られる消化酵素ペプシンの前駆物質で、胃がんの高危険群である萎縮性胃炎の進行度を判定します。

**\* 両検査では胃がんを直接見つけることはできません。**

### ABC (D) 分類 (胃がんリスク検診)

ピロリ抗体検査とペプシノゲン検査にて、胃がんになりやすい状態かどうかをA～C (D) の群に分類し、検診方法を決定する方法です。  
(除菌歴のある人はE群として区別されます。)

#### ピロリ非感染

##### A 群

萎縮なし



胃カメラ写真

#### ピロリ感染

##### B 群

軽度萎縮



##### C 群

中等度萎縮



##### D 群

高度萎縮



低い

胃がんのリスク

高い

ピロリ



ペプシノゲン

